

芥川龍之介 晩年の文芸美学

橋昭成 (大阪大学)

芥川龍之介 (1892-1927) は最晩年、評論「文芸的な、余りに文芸的な」において、「小説の筋」が持つ芸術的価値を巡って谷崎潤一郎(1886-1965)と論争を繰り広げた。芥川の言説は当時、周囲からも論争相手の谷崎からも理解されず、芥川は谷崎の説得を半ば断念する形でそのまま自死を遂げる。芥川の言説が一定の評価を得るのは戦後になってからである。戦後まもなくから昭和期にかけての先行研究においては、芥川は谷崎の「私小説」否定に対して、「私小説、心境小説」というジャンルの擁護を試みたのだと見なされてきた。それに対し本研究では、芥川の用いた「詩的精神」という概念に着目することによって、芥川がジャンル擁護を超え、芸術一般についてどのような理念を抱いていたのか明らかにすることを試みる。芥川の言説や「小説の筋」論争について、美学的見地からの本格的な考察は未だ試みられていない。優れた実作家にして批評家であった芥川晩年の文芸美学を、新たな視点から再評価したい。

小説の価値は「筋の面白さ」、話の「構成の如何」にあるとして、「構造的美観」こそ小説の持ちうる特権であると主張する谷崎に対し、芥川は「話らしい話のない小説」もあり得るという。「話らしい話のない小説」の存在を支えるのは、芥川いわく「詩的精神」という概念である。「詩的精神」は、(1)芸術作品であれば「およそ何にでもある」(2)芸術中の「どういう思想も」「必ずこの詩的精神の浄火を通してこなければならぬ」(3)「その浄火の熱の高低は直ちに或作品の価値の高低を定める」、以上三点を特徴とする概念である。この「詩的精神」の「浄火の熱の高低」を、芥川は「どのくらい純粋な芸術家の面目のあるか」と言い換える。すなわち「詩的精神」概念とは、芸術家の純粋性であると換言することができる。この「詩的精神」概念は、先行研究によると佐藤春夫(1892-1964)より始まる「散文精神論争」で用いられた概念を踏まえているであろうことが指摘されているものの、概念定義が抽象的に過ぎて不十分である。本発表では、芥川が詩的精神発露の具体例として提示した、志賀直哉「憐れな男」の一節、室生犀星の発言をそれぞれ分析することで、「詩的精神」概念を考察する。

また、芥川は創作初期から中期にかけて、イタリア美学者クローチェの英訳書を読み、影響を受けていたことが先行研究で指摘されている。クローチェ美学は、表面的に字面をなぞった程度の理解ではあるものの、大正文壇に広く受容され、「小説の筋」論争当時の谷崎もその影響下にあったとされる。芥川は、「文芸的な、余りに文芸的な」の中で、日本に受容されたクローチェ美学に対する決別を表明する。大正文壇におけるクローチェ理解がどの程度のものであり、なぜ芥川がそれと決別したかについても分析し、芥川の文芸美学考察の一端とする。